

南山アーカイブズニュース

NANZAN Archives News

第8号 2015年11月1日

目次

展示は人々の生活と精神を伝える……………	鳥巢 義文…………2
回想の中の南山	
南山小学校の思い出……………	錦織 さゆ里…………3
私とアーカイブズ	
アルシーヴに遭遇する方法……………	中村 督…………5
南山発見	
南山大学に来ていた W. C. イールズ……………	永井 英治…………7



1959年、南山大学航空部に導入されたグライダー「初代ミカエル号」の一部。（南山アーカイブズ所蔵）
1995年、「2代目ミカエル号」にその名は継承された。

展示は人々の生活と精神を伝える

鳥 巢 義 文

学校法人南山学園は小学校から中学校、高等学校そして大学、大学院までを擁する。これらの学校に通学する児童、生徒そして学生、大学院生の年齢差は当然のことながら大きい。この差に対応するように各学校で取り組まれている教育研究の方法や内容は多様であり、それぞれに特長ある仕方で展開されている。そのような中、カトリックの総合学園として同じ建学の精神に基づく各学校で営まれる事業には自ずと共通性が見られる。顕著な事例は毎年12月のイエス・キリスト生誕にまつわる飾り付けであろう。各学校には、その時節になると幼子イエスが寝かせられた「まぶね」を中心に、幼子を見守る両親、羊飼いや占星術の学者などの訪問者、家畜小屋の動物そして、それらのすべてを取り囲むようにして人々に幼子の誕生を知らせた天使と人々を幼子へと導いた夜空に輝く星とが配置された飾り付けが据えられる。このイエスの物語は、さらに児童の演じる生誕劇また生徒や学生の合唱するクリスマス・キャロルなどによっても描写される。これに加えて、大学生はイエスの生涯の終りを物語る受難劇を長年にわたってキャンパス内で演じ続けている。

今日に至るまで伝えられ、各学校でそれぞれに表現され続けているイエスの生誕物語あるいは受難物語は「福音書」という「新約聖書」の初めに置かれた四つの書物に記されている。周知のようにマタイ、マルコ、ルカそしてヨハネという名前の付された福音書はそれぞれ独自の成立経緯を有している。先述した生誕物語の飾り付けに直接的な情報を与えるのはマタイとルカの福音書であり、マルコはその点にほとんど関心を示しておらず、ヨハネはもっと異なる次元から神のことばが人となった出来事を描写している。しかし、これらの福音書がその全体を通して提供する多様な側面から描かれたイエス・キリス

トについての情報が一つのまとまりある姿に統合されることにより、今日私たちが把握している人間味あふれかつ神聖であるイエス・キリストのイメージが成立している。福音書に描かれた物語は、イエスと共に生きた人々の生活や体験の中から残され、確信され、将来に向けて人々の生活指針となる情報として受け継がれたものといっている。

南山アーカイブズで企画される諸展示は、あるものは南山学園の物語の一断面を示すものであり、また学園を幾つかの視点



や側面から複合的に紹介するものであり、あるいは学園が根を張る地域社会や世界の人々とのつながりを確認するものであるに違いない。それらはちょうど先述の福音書が私たちに描き出すイエス・キリストの物語の一断面、あるいは児童、生徒、学生の演劇や合唱による確認また継承に比べることができよう。

福音書という書物はその元になる情報を残した人々の存在と彼らのイエスへの多様な関心また一致した確信を示している。それと同様に、アーカイブズの諸展示のためにも、まずは元になる学園各学校で生きる人々の存在があり、次に彼らの活動の歴史と状況を伝える史資料の保管そして後代への継承がある。各学校が生み出す情報はさまざまであろうが、そのことが南山学園の豊さを示しており、またアーカイブズの企画や展示を一層興味深いものにしてくれるものと思う。

(南山アーカイブズ館長／南山大学人文学部キリスト教学科教授)

回想の中の南山

南山小学校の思い出

錦 織 さ ゆ り

ライネルス先生

ライネルス先生の創設された南山小学校に通学出来た喜びを、私は今しみじみと感じて、懐かしく、懐かしく昨日のことに思い出しております。

ライネルス先生に、私が初めてお会いしたのは、南山小学校の入学式でした。「お前の学校決まったよ。南山小学校だよ。」と父に言われて「え！なんで」と私は驚きました。学齢検査に行った市立小学校に入学するものだと信じていましたから。しかし市立小学校からは、虚弱児につき、一般の小学校には入学を認めず、特殊学校に入学を命ずという通知が来ました。当時特殊学校というのは、虚弱児も知的障がい児も身体障がい児も一緒にした学校のようなものでした。私は生後、病弱で幼児の罹るありとあらゆる病を体験して、学齢検査の前では、肋膜炎で、よく助かったといわれるほどでしたので、痩せて、小さく、目だけが大きく、見るかげもないほどの子ども

だったので、特殊学校が適当であったかもしれません。殆ど毎日、本を見たり、お話を作ったり、絵本の模写ばかりしていましたので、父も不憫に感じて、名古屋帝国大学時代の友人で、南山小学校創設に尽力された長松英一先生にご相談して、先生のお力添えで、南山小学校に入れていただけることになったと、後で聞きました。

入学式の日、母と市電に乗り、鶴舞に行き、そこからバスで、枳中で下車して、坂道を上がっていった所に、南山小学校がありました。昇降口を入った左側の教室の前方に、新一年生 17 人が腰かけて、周りには、先生方や保護者の大人達がいました。

すこしばかりの式があつて「次はライネルス先生のお話です。」と男の先生が言われると、私達の前に、すつくと外国の方が立たれました。今まで外国の方を見たことがなかったので、私は本当にびっくりしました。子ども

には、とても大きく見え、大きな青い目、ピンクっぽい顔、先生は、にこにこ本当に優しい笑顔で話しかけて下さいました。

子どもは、つぼみのようで

「子どもは、つぼみのようで」とお話始められました。その後、何を話されたかは全く覚えていませんが、外国の方が、なんだか怖くて、息をころしていましたが、ライネルス先生の優しく微笑まれるお姿を目にして、本当に安心して、うれしくなりました。そして妙に「子どもは、つぼみの



下から3段目右から3人目が錦織（旧姓馬嶋）さゆ里氏 1941年3月末頃に南山小学校校舎前で撮影

ようで」と少しくぐもったようなお声でのお話が印象に残りました。

家に帰り、待ちかねていた父に、今日の事、ライネルス先生の事を話しました。父は本当に喜び、安堵した顔をして、私に何度も、子どもは、つぼみのようでと真似させて喜んでいました。家にいらしたお客様や、出かけた親戚でもやらされたことには閉口しましたが、父始め、皆が喜んでいてくれるのを見るにつけ、私も嬉しい気分になりました。

「子どもは、つぼみのようで」というライネルス先生のお言葉を、今でも当日の光景と共に、鮮明に覚えています。そして懐かしんでおります。

南山小学校の、自然の中の、のびやかな教育のおかげで、虚弱児だったはずの私はすくすくと育ち、厳しい戦争も乗り越えて立派に大人になり、今 80 歳を超えてもまだ元気に過ごしております。虚弱児を救っていただいた南山小学校のおかげだとしみじみ思い、心から感謝しています。

クレヨン出～して

1939 年、南山小学校に入学した頃の春の一日です。南山小学校の一日は、朝大体 10 時頃、子ども達が揃うと高橋タネ先生の明るい声で始まりました。

一年生は 17 人、私立の小学校なので、近隣の子どもではなくて、かなり遠方からの通学もあったようで、朝の始業時間も決まっていなくて、10 時頃までに登校しました。

「クレヨン出～して」このお声を聞くやいなや、私達は教室横の道具棚の道具箱からクレヨンを取り出して机の上に置きますと、すかさず先生のお声「お弁当出～して」クレヨンとお弁当を机の上に並べると、私達は先生が次に何を言われるのか分かっているという顔をして、足を机から少し出して指示を待ちます。「お靴をは～いて」私達は、待ってましたと、ばたばたと昇降口へ走り靴を履くと、先生が入口で待っていて下さり、板の上に画用紙のはってある画板を渡して下さいます。私達はそれを肩にかけて並ぶと、いざ出発。校舎から石段を少し降り、運動場を横切って、端っこの草の生えた曲がりくねった階段を下ると大きい道に出ます。

先生が、先頭で大きいお声で「おててつないで」と歌

い出されると私達も負けずに歌います。この八事という所は、小さい森が続くゆるやかな丘陵地帯ですが、学校から少し下るともう森の風景も終わりで、そこは、野原が一面に広がっていました。

春の陽がさんさんと降りそそいでいます。先生が、草の上に座られると、私達はその周りで絵を描き始めます。先ず紙の端に丸を、それを取り囲むように放射線状に線を赤で描きお日様を、真ん中には、子どもと家を描き、下の方を草の緑に塗って、大抵それで終わりですが、春霞の中に、遠くの八事の山に山桜が咲き出すと、山を描き、桜もしっかり描いたものです。

子ども達の絵はすぐ終わります。すると先生のお声。「お弁当食～べよ」先生を囲んでお弁当を食べると、さあ待っていた遊びの時間、草原には小川も流れていたり、小さな池のような水たまりもありました。そこにオタマジャクシがたくさん泳いでいたのですくったり、花を摘んだりしました。タンポポ、スマレ、からすのえんどうやら、名前の知らない花がたくさん咲いていました。タンポポの茎を、5センチ位に切って、端を少し噛んで強く吹くと結構大きな音がする笛が出来ましたし、からすのえんどうでも中の種を取って同じように作る事が出来ることを先生が教えて下さって、帰りは、みんなで吹き鳴らして賑やかでした。時には隼人池まで遠征しました。オタマジャクシは、学校に持ち帰り、教室の中で蛙になるまでみんなで世話をして観察しました。学校に帰ってからほんの少し勉強しました。雨の日は、一生懸命勉強したと思います。遊んでばかりいたようですが、学年末には、教科書は終わっていました。

(1939 年 4 月、南山小学校入学)

南山小学校について

1936 年 4 月 1 日、設置、第 1 回入学式を举行

1941 年 3 月 30 日、南山小学校閉鎖、

1941 年 3 月 31 日、名古屋八事小学校（養護学校）に名称変更

同年 4 月 1 日、名古屋市立八事国民学校に名称変更

アルシーヴに遭遇する方法

中 村 督

制度としての歴史学

「史料とは何か」という問いに対していかに答えるべきか。会話などであると音声の問題からして、「資料」と「史料」のどちらなのかさえ判然としない。いや、それがわかったところで両者の関係は自明ではないし、むしろ説得的な回答とから遠ざかるにちがいない。ここでは史料と表記するとして、おそらく上記の問いは「何が史料となるのか」に変換したとき、多少なりとも輪郭がはっきりする。そうすれば「それは研究に依る」という最低限の回答を得ることができ、史料をめぐる具体的な会話も展開されるだろう。

しかし、フランスの歴史学、とくに近現代史に関していうと、史料に関する定義はもとより明確である。史料とは一般的に文書館に所蔵される史料のことを指す。このようにいえるのは、フランスにあって歴史学は制度的な側面を強く残す学問であるからである。フランスといえは「新しい歴史学」を提唱したアナール学派の本拠地であり、そこではたしかに文化史や社会史といった分野を中心に従来の静態的と思われる出来事史の超克が行われてきた。事実、今日でもフランスの歴史学は自由なかたちで学際的な研究が進められている。しかし、歴史学に多様な対象と方法がくわえられ、学際性が供えられたからといって、この学問の基盤を成す史料調査が揺らぐわけではない。たとえば学位論文や研究指導学位論文ではどこの史料をどれだけ見たかが重視される。換言すると論文の評価は史料の量と質に大きく左右されるのである。若い研究者がひたすら史料の博搜を求められるゆえんでもある（もともと、こうした状況はテーマの細分化につながっており、それが問題化されることもある）。

史料と文書館に近づくために

歴史学が史料によって支持される制度的側面を有する以上、他ならぬ史料こそ一つの制度である。さらに、史料を保管する文書館は、職員養成から閲覧規定に至るまでまさに制度化された場所である。文書館といっても、国立文書館、各県に置かれた県立文書館、省庁や研究所が有する文書館などその種類は多岐にわたる。いずれにせよ、誰でも研究内容と閲覧目的さえ提示すれば、文書館の入館が許可される。



パリ国立文書館（2013年にパリ郊外に建設）

ところで、史料はフランス語でアルシーヴ archives と呼ばれる。他方、この言葉は同時に文書館をも指す。したがって「私とアーカイブ」という題目を咀嚼すれば史料と文書館の両方に言及する必要があるだろう（英語のアーカイヴとフランス語のアルシーヴが置換可能だと考えると）。とはいえ、「私」の知識でそのすべてを示すことはできないので、あくまで自らの経験を基に次のことを記しておきたい。すなわち、いかにして夥しい数の史料にアクセスするか、である。

第一に先行研究の精査から始めるのがよいだろう。内容は当然として、歴史学に属する研究であればいかなる学位論文や著作においても、文献表の冒頭にならず「一

次史料 *Premières sources*」という項目が掲げられている。この項目を確認すれば、ひとまずは自らの関心に近い史料の所在を知ることができる。

第二に文書館で文書館員に研究の概要を伝え、関連し得る史料の在り処を尋ねるという方法がある。文書館員とは職員というよりは史料の専門家のことで（フランス語でアルシヴィスト *archiviste* というが、訳出の難しい言葉の一つである）、歴史研究を行う者の多くが一度はなりたと思う職業である。それほど敬意の念を払われているこのアルシヴィストはやはり史料全般に知悉しており、直接、彼らから情報を得る他はない。

第三には文書館に置かれている目録 *inventaire* の確認を挙げることができる。たとえば、現在、筆者は戦後直後のフランスでいかなる過程を経てジャーナリズムが再構築されていくのかを主題の一つとして研究に取り組んでいるが、それにはかつて存在した情報省 *Ministère de l'information* の史料がおそらく重要となってくる。国立文書館所蔵の同省文書は実に 2943 の整理番号がつけられている。これは最低でも 2943 以上の「箱」が存在することを意味する。その箱のなかに大量の史料が収められているわけだから、実際にそのすべてを閲覧するのは非効率的であるだけでなく、研究の方向性を見失いかねない。それもあって目録を通じてある程度は当たりをつけてから調査に臨むのが得策といえる。なお、上で「おそらく」とするのは、まだ何がどのように利用できるのか分からないからである。

第四は出版されている目録集に目を通すことである。「大統領」、「五月革命」、「出版」、「移民」、「第二次世界大戦」などといったテーマで目録が編集されることはよくある。大抵の場合、編者はその主題の第一人者であり、信頼を置いてよい。それは第一人者の知識を鵜呑みにするということではなく、むしろフランスの博士論文審査の特色に因るところが大きい。通常、3 名以上で構成される審査委員のうち、学位請求者の所属先ではない研究者を 2 人ほどを入れることが原則となっている。つまり、第一人者と称される研究者は年間に相当数の審査に加わっており、結果として、多くの学位論文を保持し、それが目録集の編集を可能としている。こうした目録集が便利なのは、各地域・各都市に点在する各種文書館を渡り歩いて確認せずとも、必要性に応じて調査を遂行できる

点にあるだろう。

第五はインターネットの活用であり—今日、これこそが最大の焦点であるが—デジタル化された史料の利用である。たしかに文書館によってはデジタル化された史料もあり、それを利用しない手はないだろう（とくに国立図書館では定期刊行物を含む出版物のデジタル化が急速に進んでいる）。ただ、国立文書館にかぎっていうと、予算という物理的な問題にくわえて、あまりに膨大な史料の数からしてデジタル化に動き出す気配はみられない（この点も含めて国立文書館のデジタル化に関する諸状況は『現代史研究』（2012 年、第 58 号）に記した）。また、私文書に関わる問題もあるだろう。文書のなかには寄贈者をはじめ、私信の送り手あるいは受け手の閲覧許可が必要とされることも多く、単線的にデジタル化へと移行できない要因になるように思われる。それでも多くの文書館キーワードの検索を通じて目録の詳細をファイルで閲覧することが可能であり、遠くからでも効率よく準備に取り組める。

歴史を刷新するということ

こうしてみれば、研究テーマを選択すればすぐに上記の方法を使ってアーカイブと史料にアクセスでき、歴史研究が完成するようにみえる。しかし、実際にはそうはいかない。最後にこの点に言及しておきたい。フランスで歴史研究の新しさを示す一つの条件として、初めて閲覧された史料の提示というものがある（対象自体が新しければさほど問題にはならないかもしれないが）。その点、先行研究や目録などに記載されている史料は、基本的にはすでに閲覧されたものである。だとすれば、どうしてもプラスアルファの史料を加える必要が出てくる。そこで、最近では研究に関わる存命中の人物インタビュー調査を行ったり、視聴覚資料が利用されたりする。それでも、より有効なのは私文書の閲覧であろう。私文書といえば、一つには文書館に所蔵されているものがある。これは上述のように利用者が寄贈者らに閲覧許可を取るよう定められていることもあり、困難が伴う。筆者の経験では、さる出版社の史料を閲覧するにあたって、創刊者の弟の許可が必要となった（フランスでは大学人とジャーナリストが非常に密接な距離にあるうえ、そもそも人間関係が狭いネットワークが構築されていることもあ

って、比較的、連絡はつきやすい。これはフランスの少し特殊な点であるように思われる)。私文書の入手として考えられるもう一つの方法は、直接、個人なり組織なりに連絡をとることである。とくに相手が企業のような商業的組織であると(ましてやこちらが外国人であると)、歴史への熱意を伝えて交渉することになる。さらに、かならずしも私文書というわけではないが、「研究の新しさ」という点でいうと、「箱」を開けていくなかで幸運に

遭遇するということもあり得る。

以上、アーカイヴについてもっともらしいことを述べたつもりである。しかし自らの拙い経験を思い起こすと、次のような結論に至らざるを得ない。結局、二つのアーカイヴに対して頭よりも身体を動かし、最後は幸運を祈ることが重要であると。

(南山大学外国語学部フランス学科講師)

南山発見

南山大学に来ていた W・C・イールズ

永井 英治

アジア・太平洋戦争敗戦後の諸改革のなか、学校制度は大きく改変され、高等教育機関は大学に一本化された。南山大学を含む多くの新制大学は 1949 年度からの発足となった。

GHQ/SCAP(連合国軍最高司令官総司令部)の中で学校教育を管轄した CIE(民間教育情報局)の「教育顧問」であった W・C・イールズは、この 1949 年の 7 月から翌年 5 月まで全国の 30 に及ぶ大学で講演を行なった。

イールズの講演は、7 月 19 日に行なわれた新潟大学開学記念講演会での講演が第 1 回となったが、開催された新潟大学にとどまらず全国に大反響を招いた。イールズの講演内容を批判する意見が表明されるだけではなく、東北大学や北海道大学では講演阻止の運動が展開された。

「イールズ事件」「イールズ旋風」として知られるこの一連の事態は、米国の対日占領政策の転換を示す一例として理解されているが、CIE もけっして一枚岩ではなく、その内部には多様な見解が併存していたとされる。

上智大学を含む 12 の公立・私立大学は、CIE の強力な働きかけにより、1948 年度に新制大学として発足していた。この 12 の大学の中に女子大学・キリスト教系の

大学が少なくないことから、文部省の計画を 1 年前倒しにさせて新制大学の発足を促したのは、CIE 全体の意志ではなく、それらの大学を重視する人々の意向によっていたとみられている。

イールズは junior college 制度を専門とする教育学研究者であった。junior college は日本の学校制度では短期大学に位置付けられるが、社会教育を重視する点に特徴がある。最初の学校教育法には短期大学の規定はなかったが、旧制の高等教育機関のなかには、新制大学への転換を困難とみて junior college としての認可を求める声もあった。1949 年 6 月、短期大学の規定を盛り込んで、学校教育法が改正された。短期大学は法的根拠をもったのであり、イールズは短期大学の設置に関してこそ評価される。

1950 年 2 月 17 日、イールズは D・M・タイパー(CIE 教育課成人教育係、青年・学生活動担当)とともに南山



写真中央向かって左がイールズ 1950 年 2 月

大学を訪れている。南山アーカイブズには、その時に撮影された数枚の写真が保管されているが、その様子は公式の学校行事というより私的な雰囲気が濃厚である。

イールズとタイパーは、2月16日・17日の2日間、名古屋大学で講演・懇談を行なっているが、南山大学での講演はなかった。名古屋大学での講演のついでに立ち寄ったと思われるが、この時の南山大学は、現在の名古屋キャンパスではなく五軒家町にあり、名古屋大学も現在の場所ではなく名古屋城内にあったのであるから、二つの大学の間にはかなりの距離があった。

南山大学を訪れたイールズとは、初代学長アロイス・パッヘと教員および数名の学生と間で懇談会をもった。写真は、その様子を写したものであり、イールズの後ろには五軒家町キャンパス一帯のスケッチ画が見られる。右端には数名の学生も写っており、一部の学生も懇談会に参加していたことが確認できる。

後日、この懇談会の内容は、南山大学および名古屋外国語専門学校の教員による専任教員会議の場で報告された。学長からの報告では、懇談会の内容は次の二つのテーマからなっていた。

- 1.) 大学に於ける学的自由について
- 2.) 大学に於ける教授法の改善について

これを見ると、イールズの講演で最も問題となった部分がやはり懇談会でも触れられたことがわかるが、専任教員会議では、2.)に関する2枚の資料が配布された。今それらのタイトルと項目のみを記すと、以下のとおりである。

[書類①]

IMPROVEMENT OF UNIVERSITY TEACHING

Suggestions by Walter C. Eells

- A. Standard for an Academic Unit as Adopted by University Accreditation, July 8, 1947.
(Section 11, Paragraph 7, d).
- B. Suggested Types of Student Activity Outside of Classroom.

- C. Requirements for Course in "Introduction to Education". (As given at Stanford University, W. C. Wells. 3-unit course)

[書類②]

LECTURE METHOD IN UNIVERSITY TEACHING

- A. Bad Features of the Lecture System
- B. Good Features of the Lecture System
- C. Suggestions for Improvement of Lectures

書類はどちらもタイプ印刷をガリ版印刷したもので、用紙のサイズは、初期の南山大学でよく使われたB4変形である。南山大学が用意した懇談会資料と推定される。どちらも授業を実施するための技術的方法が列記しており、書類①の Student Activity Outside of Classroom も課外活動ではない。全体として今日のFD活動の原型といえようが、基礎的な指摘（立って授業をする。早口になり過ぎない…）が多い。「イールズ事件」で注目された講演の趣旨とは異なる、実践的な教育方法論である。

これに対して、成沢理平から報告されたタイパーとの懇談会では、「学生会がしてはならないこと」「学校に於ける責任の所在」「教育活動と政党活動」「自治会活動の原則」などが論じられたことが紹介されていて、こちらこそ「イールズ事件」を彷彿とさせる内容であったと推測される。もともとイールズの大学講演行脚には、はじめからタイパーも同行し、イールズは対教員、タイパーは対学生という役割分担があった。しかし、「イールズ事件」ではタイパーの存在はほとんど後景に退き、実践的教育方法論もかすんでしまっている。教育学研究者であったイールズの「イールズ事件」には収斂し難い側面については、事実確認というレベルからの掘り起こしが行われている。南山大学で行なわれたイールズおよびタイパーとの懇談会に関する資料もまた、わずかではあるが、「イールズ事件」でのタイパーの存在を浮かび上がらせるとともに、イールズの異なる側面について考えさせるのである。

(南山アーカイブズ／南山大学人文学部人類文化学科教授)